

森林の利用Ⅲ

森林と観光

日時：平成20年2月3日（日） 10:00～12:00

講師：大浦 由美（和歌山大学経済学部准教授）

概況



観光とは、日常生活を離れ、再び戻る予定でレクリエーション（以下、レク）を求めて移動することです。森林レクは森林地域におけるレクであり、森林散策など森林自体が活動の場となるタイプと、スキーやゴルフなど森林地域に設置した施設を利用するタイプに分かれます。森林に関する世論調査によると、森林自体を楽しむこと目的として、山や森に出かける人が増えています。森林レクには、森林をレクの場として利用する利用者サイドと、観光産業の場として利用する開発主体サイドという二つの側面があります。

■森林観光・レクの展開

国有林は、森林レク機能の最大の供給源です。国有林の森林レク事業は「森林空間総合利用整備事業」に基づいて行われます。国有林が森林レク事業を行う意味として、基本的人権の一部として良質なレクの機会を確保する「公共的使命」だけでなく、収入確保の側面もありました（事業主体に土地の使用許可を与える代わりに、事業主体から土地使用料を受け取る）。

国有林のレク利用の歴史は意外と古く、大正時代にまで遡ります。当初は、森林にレク機能を認めつつも、国有林の保護管理に留まるものでした。第二次大戦以後、高度成長期・バブル成長期・バブル崩壊後にわたり、森林レク事業はその時々の政策や世情と相互に影響しながら変容していきました。

■新たな試み

森林レクはかつての施設単独利用型(例えばスキー場やゴルフ場)から、交流・協働・環境保全型(例えば、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズム、森林セラピー)へと変わりつつあります。いまや、森林レクは地域再生に不可欠な地場産業であり、今後ますます発展することが期待されています。グリーン・ツーリズムは、農村の自然や景観などを利用して都市住民が農村に滞在するツーリズムで、農村の経済活性化、社会活性化、農山村環境の保全といった効果が期待されています。特に、経済効果は多面的であり、取り組み方によってはその影響は高くなるといった結果も出ています。ただし、林業や森林分野はエコ／グリーン・ツーリズムの波及効果が得にくいという問題点があります。自然セラピーブームを受けて近年広まっている森林セラピーは滞在型・通年型の観光であり、森林を含めた地域資源を総合的に活用できるため、新たな雇用を創出する、少ない資本で開発できるという利点がある一方、一過性のブームで終わる恐れがあるなどの課題もあります。